

# 現今大学生の学習意欲に関する一考察（3）

吉 岡 剛

本論稿はこれをもって一応完結する。従って全目次を改めて掲げておきたい。

はじめに

1. 私語をめぐって
2. 学習意欲低下の要因仮説
3. これまでに見られる研究業績
4. アンケートについて
5. 考察

## (1) 実態整理及び診断

- 〈1. 回答者の分析〉
- 〈2. 判断対象学生の分析〉
- 〈3. 受講態度を巡って〉
  - ア. 「学習意欲」
  - イ. 「進学理由」
  - ウ. 「受講状況」
    - a. 出席率
    - b. 遅刻・早退
    - c. 居眠り
    - d. 内職
    - e. 私語 ..... 以上（1）
    - f. 授業出席
    - g. 講義ノートを取り方
    - h. 受講態度
    - i. 受講の意味付け
    - j. 学習姿勢
    - k. 大学観
    - l. 日常生活
    - m. 私語（再考） ..... 以上（2）

## (2) 学習意欲低下の要因分析

- 〈1. 中高教員の「学習意欲低下要因」判断〉
  - a. 本人要因視
  - b. 大学要因視
  - c. 社会要因視
  - d. 家庭要因視

e. 中高教育要因視

## 〈2. 大学教員の「学習意欲低下要因」判断〉

- a. 大学生本人要因視
- b. 大学要因視
- c. 家庭要因視
- d. 高校までの教育要因視
- e. 時代・社会要因視

## 〈3. 大学生自身の回答による要因分析〉

- ア. 「大学進学決定時期」
- イ. 「進学理由」
- ウ. 「大学生の価値観」
- エ. 「性格」
- オ. 「家庭状況」
  - a. 両親の性格・行動
  - b. 大学生による家庭教育回顧
- カ. 「大学生による学校時代回顧」
  - a. 小学校時代
  - b. 中学校時代
  - c. 高等学校時代

## 6. 学習意欲喚起の方策

- a. 私語を防ぐ実践
- b. 授業内容上
- c. 授業方法上
- d. 授業の『自己評価』視点・例

結 び

付記)

- ① アンケート3種全文は論稿（2）（3）の末尾に分けて掲載した。
- ② 以下の統計で大学同士を合算する場合、学生数が不均衡な為、予め各大学内の平均を出し、その上でそれらを合

計、更に平均を割り出した。大学内平均は実数によっているので、「計平均」は男女各計の平均ではなく、男女合算数による平均である。

- ③ 既に前稿迄に〈表 28-2〉及び〈図 11〉迄を掲載したので、今回は〈表

29-1〉及び〈図 12〉から始まる。

- ④ 前稿の〈図 11〉中「無内容講義」の大学生回答 53.8%は 33.5%と訂正し、点の位置も左 33.5%に平行移動して理解されたい。

## (2) 学習意欲低下の要因分析

前々稿で説明した 3 種のアンケート調査結果からみて、「私語」等をその典型例に、現行の「大学生」の学習意欲は少なくとも現実に「大学で学ぶ学生」としては、従来より低下していることを否めない。従って、その要因を分析し、適切な改善の方策を打ち立て、然るべき実践をすることが必要と思われる。勿論、これに対し、例えば、中・高教員の 46.4%が「大衆大学では学習意欲の高い学生のみを期待できない」と回答したことを、客観的事実として一部受容することも必要であろう。また、ごく少ない 5.5%ではあるが、「人格形成は大学卒業後の社会でも行われるから楽観してよい」を受容することもできる。しかし、大学は単なる人格形成の場ではなく、また、教育の限界が、現状を許容して必然的に大衆大学にあるとも言えない。つまり、学習意欲の低い学生に対しても、教育方法的に学習意欲を喚起し、大学で学ぶ意味を認識させることは大学に課せられた責務であろう。

その点で社会から大学教育への各種要望が出されているのであり、特に中・高教員は、代表的に、例えば、67.3%迄もが「卒業を厳しくする」ことを求めるのである。また、関連的に、40.0%が「入試制度の改善」を主張する。同様、21.8%が「若者文化を見極めて、教育内容・方法を変えるべき」とも言う。そして更に 11.8%が「同年齢の三分の一を養成する大学がしつかりしないと、国際社会で日本は危機に瀕するだろう」と予測する。

これに対し、大学教員の大学生観は、アンケート結果では比較的楽観的と言えよう。つまり、社会に出れば「必要に応じて努力し、社会を支える」という見解と「或程度の学生は将来を期待できる」が同じ 28.6%、「文科系の教育効果は長い目で見ろべき」が 23.8%、「学習生活には問題があっても、総じて他の面では希望が持てる」が 15.2%、また「大学教育は講義以外でも学力や人格形成に貢献している」が 11.4%となっている。勿論、逆に捉えれば、これらにチェックしなかった残りは問題意識をもっているとも言える。従って、「生活全般に問題多し」とする者が 38.1%、「将来の国際社会で日本の位置は危険」とする者が、中高教員より多く 21.0%いることになる。一方、4.8%が「時代の傾向に従って、大人が価値観を変えるべき」という。これらに留意しつつ以下に意欲低下の要因を各種アンケート結果から考察していこう。

〈1. 中高教員の「学習意欲低下要因」判断〉

a. 本人要因視

表29-1 中高教員による「学習意欲低下要因」判断

順位	要 因	中学教員(62名)	高校教員(48名)	全(110名)
①	知的好奇心の低下	43.5	60.4	50.9
2	進学後の解放感・自由感	48.4	41.7	45.5
3	成るようになる社会	38.7	43.8	40.9
④	進学理由薄弱	40.3	37.5	39.1
⑤	努力評価の低下	38.7	37.5	38.2
6	卒業容易な大学実態	33.9	41.7	37.3
⑦	自律心の欠如	29.0	35.4	31.7
⑧	受験勉強後の空白感	29.0	33.3	30.9
⑨	将来展望の欠如	29.0	31.3	30.0
10	講義の魅力欠如	24.2	35.4	29.1
11	テレビや漫画	29.0	25.0	27.3
12	大学のマス・プロ授業	29.0	22.9	26.4
13	入試勉強による消耗	24.2	22.9	23.6
⑭	三無主義	24.2	18.8	21.8
15	学習充実体験無し	24.2	14.6	20.0
16	飽食時代	21.0	18.8	20.0
17	暗記主義学習の影響	21.0	14.6	18.2
⑮	学力不足	14.5	20.8	17.3
19	アルバイト	19.4	12.5	16.4
20	家庭の過保護・過干渉	17.7	12.5	15.5

\* 要因視の低いもの……就職容易, 校内暴力, 家庭不和, 雑事多忙, 教師不信, スポーツ, サークル活動, 社会への幻滅, 性格, 管理主義教育, 小中高教育

〈表 29-1〉で、特に「本人」に問題があるのは、○印をつけた1位の「知的好奇心の低下」50.9%, 4位の「進学理由薄弱」39.1%, 5位の「努力評価の低下」38.2%, 7位の「自律心の欠如」31.7%, 8位の「受験勉強後の空白感」30.9%, 9位の「将来への展望欠如」30.0%など上位に多く、これに14位の「無関心・無気力・無感動（三無主義）」21.8%, 18位の「学力不足」17.3%が続く。またこの他、表記以外に「本人の未成熟」14.5%, 「不本意進学」が10.9%, 「専攻選択のミス」6.4%があるが、「本人の性格」は2.7%と殆ど関係づけられていない。なお、中高教員両者間の差は高校教員が「好奇心」「自律心」「学力不足」を問題視しているのに対し、中学教員は「三無主義」を問題としている点にある。いずれにしろ、中高教員の本人問題説は強く、学習意欲低下が既に大学入学以前に有ることを否定できない。従って、大学はこの改善、例えば、知的好奇心の喚起や進学の意味の確定から対処しなければならないことになる。

b. 大学要因視

「大学」に関する問題点は、2位の「進学後の解放感・自由感」45.5%, 6位の「卒業容

易」37.3%，10位の「講義魅力欠如」29.1%，12位の「マス・プロ授業」26.4%であるが、このうち、2位の「解放感・自由感」は大学教育の本質と関わるものであり、逆に、それ迄の中高教育の在り方が問われるべきであろう。例えば、13位の「入試勉強による消耗」23.6%，15位の「学習充実体験無し」20.0%，17位の「暗記主義学習の影響」18.2%，そして、表外の「これまでの個性無視の教育」10.9%，「これまでのマルバツ試験方法」10.0%がそれである。なお、学習意欲低下要因の仮説として先に挙げた「校内暴力」は中高共ゼロ回答であった。

ただ、上述の6位「卒業容易」、10位の「講義の魅力」、12位の「マスプロ」は大学に一考を求めるものであり、特に6と10への高校教員の批判は厳しく捉えられべきであろう。なお、選択肢中、上記外の大学関係問題は次のとおりであった（表29-2、一部再録）。このうち「一般教養科目」については、特に高校教員が学生の不満を聞くことが多いのであろう。「大学教員の指導力不足」や「カリキュラムの不適切さ」は率は高くはないが、ほぼ10%で問題視されている。

表29-2 中高教員による「学習意欲低下要因」判断

—大学に関して— %

順位	要 因	中学教員(62名)	高校教員(48名)	全(110名)
1	卒業容易な大学実態	33.9	41.7	37.3
2	講義の魅力欠如	24.2	35.4	29.1
3	大学のマスプロ授業（以上再録）	29.0	22.9	26.4
4	一般教養科目の内容不適切	11.3	18.8	14.5
5	大学教員の指導力不足	11.3	12.5	11.8
6	カリキュラムの不適切さ	11.3	6.3	9.1
7	休講の多さ	6.5	8.3	7.3
8	学習オリエンテーションの不備	3.2	4.2	3.6
9	多すぎる必修科目・指定科目	4.8	2.1	3.6

#### c. 社会要因視

「社会」に関しては、3位「成るようになる社会」40.9%，11位「テレビや漫画」27.3%，16位「飽食時代」20.0%が挙げられている。勿論、これらへの大学の対処は限界をもつが、学習指導を通した学生の対社会観の変革は期されるべきであろう。他に、先に挙げた「努力評価の低下」「将来展望の欠如」「三無主義」も社会要因に含まれるであろう。なお「売手市場の就職」はゼロ、「社会・政治への幻滅」は0.2%と僅かであった。

#### d. 家庭要因視

「家庭」に関わる学習意欲低下要因は、19位の「アルバイト」16.4%，20位の「家庭の過保護・過干渉」15.5%の他、表外に「家庭の教育力低下」9.1%が有る。また、この他、4位の「進学理由薄弱」なままの進学許容、7位の「自律心の欠如」を招いた育児、16位の「飽食時代」、14位の「三無主義」も関係なしではない。

e. 中高教育要因視

中高教員自身の自省的判断は〈表 29-3〉に見るように数多い。特に中学教員の問題意識は高く、高校教員の場合は寧ろ小中教育への批判が見られる。但し、高校教員の 10.4%は「自らの指導力不足」を要因視している。

表29-3 中高教員による「学習意欲低下要因」判断

— 高校までの学校教育に関して — %

順位	要 因	中学教員(62名)	高校教員(48名)	全(110名)
1	充実した学習体験欠如	24.2	14.6	20.0
2	暗記主義教育	21.0	14.6	18.2
3	個性無視教育	17.7	2.1	10.9
4	マルバツ式試験方法	14.5	4.2	10.0
5	高校教員の指導力不足	3.2	10.4	6.4
6	教員の過度の進路干渉	6.5	4.2	5.5
7	中学校の教育指導に問題	0	8.3	3.6
8	盛沢山の高校の教育内容	1.6	6.3	3.6
9	厳しい管理主義教育	3.2	4.2	3.6
10	小学校教育に欠陥	0	6.3	2.7
11	教員・価値への不信	1.6	0	0.9
12	校内暴力体験の後遺症	0	0	0

〈2. 大学教員の「学習意欲低下要因」判断〉

a. 大学生本人要因視

前々稿で説明した大学教員へのアンケート結果中、「本人」に学習意欲低下要因があるとするものを高位からまとめると〈表 30-1〉のようになる。1位の「無目的進学」は特に短大と私大がそれぞれ 66.7%及び 56.0%と圧倒的に高い。逆に言えば、国公立大への進学が一般に厳しい競争の為、目的意識が高いということであろうか。国公立大で最大の意欲低下理由は「好奇心低下」で 36.7%となっており、「無目的進学」は「入試反動」とともに 2 位、23.3%である。一方、この「好奇心低下」は、私大で 2 位、49.3%、短大では「指示待ち姿勢」「充実学習体験欠如」とともに 3 位、45.8%である。短大で 2 位を占めるのは「学力不足」の 50.0%であり、いずれにせよ、これらの判断は大学教育自身に重要かつ困難な問題を提起しているといえる。

なお、私大で国公立大より目立つ要因は、「無目的進学」の他、「人生観未成熟」33.3%、「充実学習体験欠如」25.3%、「不本意入学」20.0%、「有用性・即物主義」18.7%など、資質や学習体験、進学過程、学習目的観に関わる他、「アルバイト」33.3%や「サークル活動」16.0%など、学習外活動であり、それらが一般的な私大学生の学習姿勢への教員の問題意識となっていると言えよう。国公立大での批判は「努力価値観の低下」「三無主義」「ルーズな生活態度」「就職パスポート観」など、すべて 20.0%を占める生活態度・大学観に関するものであ



表30-1 大学教員による「学習意欲低下要因＝本人説」 %

順位	校 種 要 因	大 学			短 大
		国公立	私 立	計	
1	無目的進学	23.3	56.0	46.7	66.7
2	好奇心低下	36.7	49.3	45.7	45.8
3	人生観未成熟	16.7	33.3	28.6	29.2
4	学力不足	16.7	30.7	26.7	50.0
5	アルバイト	10.0	33.3	26.7	37.5
6	指示待ち姿勢	16.7	26.7	23.8	45.8
7	努力価値観の低下	20.0	22.7	21.9	25.0
8	就職パスポート観	20.0	22.7	21.9	12.5
9	充実学習体験欠如	10.0	25.3	21.0	45.8
10	三無主義	20.0	20.0	20.0	29.7
11	ルーズな生活態度	20.0	18.7	19.0	20.8
12	入試反動	23.3	17.3	19.0	12.5
13	不本意入学	10.0	20.0	17.1	12.5
14	有用性・即物主義	6.7	18.7	15.2	8.3
15	学習法への無知	10.0	16.0	14.3	41.7
16	自立心欠如	13.3	14.7	14.3	33.3
17	サークル活動	6.7	16.0	13.3	4.2
18	進学後の空白感	16.7	10.7	12.4	16.7
19	自己中心勝手主義	13.3	12.0	12.4	12.5
20	社会観欠如	6.7	8.0	7.6	25.0

\* 要因視の少ないもの…… スポーツ, 友人交際, 経済的面, 校内暴力  
注) 国公立大 30名, 私大 75名, 短大 24名

る。短大に関しては、既述の「無目的進学」の他、「学力不足」50.0%、「指示待ち姿勢」45.8%、「充実学習体験欠如」45.8%、「学習法への無知」41.7%、「自律心欠如」33.3%、「社会観欠如」25.0%など、学習への全体的姿勢の弱さが要因視されている。

いずれにしろ、全体として「無目的進学」と「知的好奇心の低下」が学習意欲低下の主要因として留意されていることになる。これを、中高教員の判断と対応させると〈図12〉のようになる。その主な部分は、ほぼ相互に一致するが、比較的大学教員の方が厳しく見ていることになる。なお、「スポーツ」と「校内暴力体験」はそれぞれ3.8%、1.0%と殆ど要因視されていない。

これら本人の問題点は、大学での積極的な学習指導を通して意識を改革し、生活態度を改善するべきであろう。そのためには、教授する側が、授業方法や生活指導に関して意識的・積極的に努力する必要がある。

#### b. 大学要因視

学習意欲低下要因は「大学」自体の中ではどうであろうか。アンケート結果によると、〈表30-2〉のように順位づけられる。1位の「教授法研究不足」は49.5%と、ほぼ半数の教員に

よって自覚されている。この他、特に教員の改善努力を必要とする要因は、○印を付けた「単位評価の甘さ」31.4%、「一般教養内容」30.5%、「難解な講義」23.8%、「個人的接触少なし」22.9%、「マンネリの講義」10.5%である。一方、条件改善を求める要因は、「大講義室」38.1%、「履修指定科目」36.2%、「カリキュラム不適」25.7%である。

なお、国公立大に高いのは「履修指定科目」50.0%、「難解な講義」30.0%、「オリエンテーション不備」16.7%であり、私

大に高い要因は「大講義室」41.3%である。一方、短大は「単位評価の甘さ」41.7%、「難解な講義」41.7%、「個人的接触少なし」33.3%が特に高いが、「一般教養内容」や「カリキュラム」に関しては、ともに16.7%で、四年制大学に比し余り問題視されていない。

図12 学習意欲低下要因本人視の中高・大学教員対比

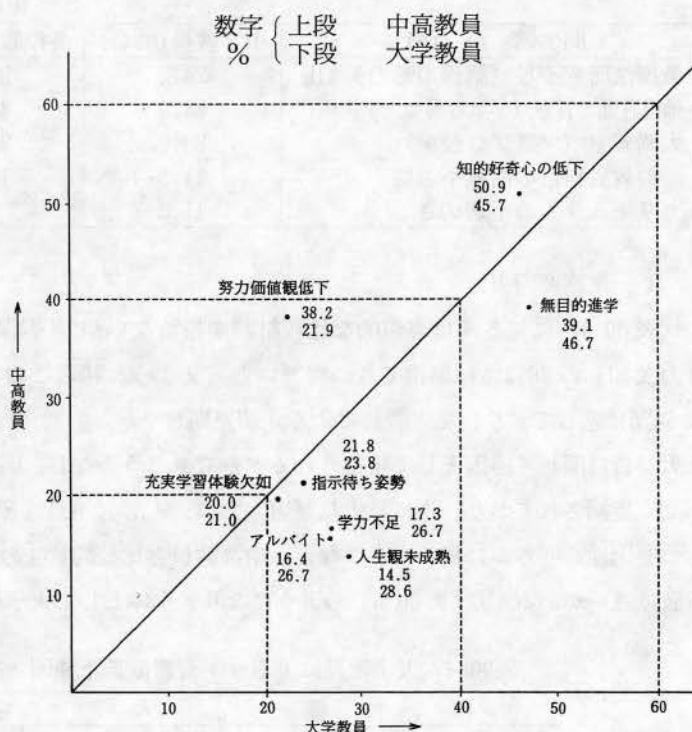


表30-2 大学教員による「学習意欲低下要因＝大学説」%

順位	校 種	大 学			短 大
		国公立	私 立	計	
①	教授法研究不足	53.3	48.0	49.5	54.2
2	大講義室	30.0	41.3	38.1	41.7
3	履修指定科目	50.0	30.7	36.2	37.5
④	単位評価の甘さ	26.7	33.3	31.4	41.7
⑤	一般教養内容	26.7	32.0	30.5	16.7
6	カリキュラム不適	30.0	24.0	25.7	16.7
⑦	難解な講義	30.0	21.3	23.8	41.7
⑧	個人的接触少なし	23.3	22.7	22.9	33.3
⑨	マンネリの講義	10.0	10.7	10.5	8.3
10	オリエンテーション不備	16.7	6.7	9.5	8.3
11	休講多し	0	4.0	2.9	0
12	評価の厳しさ	3.3	0	1.0	8.3

い。なお、中高教員の指摘と対比すると（表30-3）、「教授法研究不足」や「一般教養科目の内容」「カリキュラム」等への大学教員の反省度は高いが、逆に「単位評価が甘い」は高校教員に比べて少なく、3分の1の教員は甘いと思っていないわけである。

表30-3 大学教育の問題性に対する判断の対比

— 中高等教育教員において — %

問 題 点 (例)	中学教員(62名)	高校教員(48名)	大学教員(105名)
教授法研究不足 (講義の魅力欠如)	24.2	35.4	49.5
単位評価の甘さ (卒業容易な大学実態)	33.9	41.7	31.4
大講義室 (マスプロ授業)	29.0	22.9	38.1
一般教養科目の内容不適切	11.3	18.8	30.5
カリキュラムの不適切さ	11.3	6.3	25.7

## c. 家庭要因視

〈表 30-4〉に見る率は客観的な比較材料を持たないが、「過保護・過干渉」の37.1%、「教育力欠如」の36.2%は無視できぬ程高いと言えよう。特にこの2項に関する短大教員の判断は50%に達しており、私大教員による「幼児期甘やかし」32.0%は、国公立大の6.7%に対し、私大が特に関わる遠因として重視されるべきであろう。なお、国公立大では「無理な塾通い」が高く指摘されており、逆に私大及び短大では、9.3%、8.3%と低い。このことは受験体制のもつ要因性を明らかに伺わせる。なお、中高教員と比較的意味の近い項目で対照させれば（選択肢に違いがあるが）〈表 30-5〉のようになり、全体として大学教員の家庭教育批判は強い。

表30-4 大学教員による「学習意欲低下要因＝家庭説」 %

順位	校 種 要 因	大 学			短 大
		国公立	私 立	計	
1	過保護・過干渉	36.7	37.3	37.1	50.0
2	教育力欠如	30.0	38.7	36.2	50.0
3	幼児期甘やかし	6.7	32.0	24.8	20.8
4	無理な塾通い	23.3	9.3	13.3	8.3
5	過期待	10.0	10.7	10.5	16.7
6	家庭の混乱	10.0	5.3	6.7	8.3
7	世代断絶	6.7	5.3	5.7	4.2

表30-5 家庭教育の問題性に対する判断対比

— 中高等教育教員において — %

問 題 点 (例)	中高教員(110名)	大学教員(105名)
過保護・過干渉	15.5	37.1
自律心育成不備 教育力欠如	31.7	36.2
飽食時代 幼児期甘やかし	20.0	32.0 (私大教員75名)



d. 高校までの教育要因視

〈表 30-6〉のとおり，対家庭同様，厳しい見方が目立つ。特に「知識暗記主義」53.3%，「一斉教育」50.5%，「マルバツ式試験」41.9%は非常に高いといえる。ただ，これら問題の元凶が実は大学入試にあって，大学こそが問題であることも否定できない。例えば国公立大教員の「厳しい進学準備」批判 36.7%は，事実上天に唾していることになる。なお「校内暴力」の要因視はここでも少ない。一方，短大教員の「一斉教育」66.7%，「マルバツ式試験」54.2%，「管理主義校則」37.5%，「予備校受験教育」45.8%，「教員の進路干渉」50.0%は特に注目する必要がある。なぜなら，短大学生がそこで四年制大学向きの受験体制の犠牲となっていることが明らかだからである。

表30-6 大学教員による「学習意欲低下要因＝高校までの教育説」 %

順位	校 種 要 因	大 学			短 大
		国公立	私 立	計	
1	知識暗記主義	53.3	53.3	53.3	45.8
2	一斉教育	40.0	54.7	50.5	66.7
3	マルバツ式試験	36.7	44.0	41.9	54.2
4	厳しい進学準備	36.7	20.0	24.8	29.2
5	管理主義校則	26.7	22.7	23.8	37.5
6	予備校受験教育	13.3	20.0	18.1	45.8
7	教員の進路干渉	10.0	16.0	14.3	50.0
8	校内暴力	3.3	1.3	1.9	8.3
9	体罰	0	1.3	1.0	0

表30-7 大学教員による「学習意欲低下要因＝時代・社会説」 %

順位	校 種 要 因	大 学			短 大
		国公立	私 立	計	
1	テレビ・漫画	33.3	52.0	46.7	45.8
2	飽食時代	30.0	36.0	34.3	45.8
3	楽観的風潮	3.3	42.7	31.4	62.5
4	入試制度の弊害	33.3	20.0	23.8	20.8
5	レジャー産業	20.0	21.3	21.0	37.5
6	大人の指導力弱	23.3	20.0	21.0	20.8
7	社会の不確定性	16.7	16.0	16.2	25.0
8	既成社会に幻滅	26.7	8.0	13.3	8.3
9	就職容易	16.7	10.7	12.4	25.0
10	人間・世代断絶	13.3	12.0	12.4	12.5
11	拝金時代蔑視	10.0	6.7	7.6	8.3
12	政治不信	13.3	2.7	5.7	20.8

e. 時代・社会要因視

〈表 30-7〉に見るように，総じて，社会の厳しさの欠如が優位に問題とされており，特に

私大にそれが高い。国公立大では、「入試制度の弊害」33.3%、「既成社会への幻滅」26.7%、「政治不信」13.3%が目立ち、逆に「楽観的風潮」は3.3%と殆ど関係ないとしている。私大では「既成社会への幻滅」と「政治不信」は、それぞれ8.0%、2.7%と非常に少ない。一方、短大は、「社会の不確定性」25.0%が高い他は、特に時代の厳しさ欠如状況が高く要因づけられている。全体として、これら時代・社会への要因視は、先に述べた（表 29-1）中高教員の「成るようになる社会」40.9%、「テレビや漫画の魅力性」27.3%、「飽食時代」20.0%に対応しているといえる。ただ、大学教員は、特に「テレビ・漫画」と「飽食時代」を、46.7%及び34.3%と高く問題視している。

### 〈3. 大学生自身の回答による要因分析〉

#### ア. 大学進学決定時期

これは、大学での学習意欲に影響するところ大と考えて良いであろう。例えば、年齢的に早い決定は、本人の意欲によるものとは必ずしも言えず問題がある。大学生へのアンケート結果は

表31-1 学生による「進学決定時期」回答 %

校 種	大 学			短 大
決定学校段階	国公立	私 立	計	
小 学 校	32.8	27.3	31.0	13.7
中 学 校	32.3	31.6	32.1	28.2
高 等 学 校	32.2	38.2	34.1	57.3
NA	2.7	2.9	2.8	0.8

〈表 31-1〉のように、小・中・高校の各段階にほぼ平均して分散していることが分かる。しかし、更に大学別・男女別に詳細に見ればどうか（表 31-2～4。図 13）。全体として女子の方が小学校段階から決定しており、特に有名私大・旧帝大・共学公立大において著しい。男子は旧帝大が小学校時に高く、中学段階迄で76.2%に及び、高校段階では僅か17.0%と少ない。これに対し、地方国大では、中学校段階で、また、一般私大と国公立大では、高校段階での率が歴然として高い。

これらのことは、前稿での各大学の学習態勢分析と対応させる時、意欲低下に関する要因を或程度2極に分けて捉えさせると言って良い。早期決定の所謂難関校進学者は、小学校段階から保護者の示唆と期待と干渉を通した通塾など、受験向き学習を進めてきたと考えられるし、他方、一般大学や地方国大及び短大の学生は、比

表31-2 進学決定時期＝小学校時

大学別※	男子	女子	計
A 大	23.0	25.8	24.3
B 大	21.8	41.5	30.2
私 大 平 均	22.4	33.7	27.3
D 大	36.4	52.6	39.3
E 大	23.8	12.5	17.8
F 大	( )	55.6	43.5
G 大	—	30.6	30.6
国公立大平均	30.1	37.8	32.8
全 平 均	26.3	36.4	31.0
C 短 大	—	13.7	13.7

※大学の固有名詞を避け、社会の通俗的表現を用いれば次のようになる。

A大	私立一般大学	507名
B大	私立有名大学	96名
D大	旧帝国大学	107名
E大	地方国立大学	45名
F大	公立大学	23名
G大	公立女子大学	111名
C大	公立女子短期大学	117名

（詳しくは前稿参照）

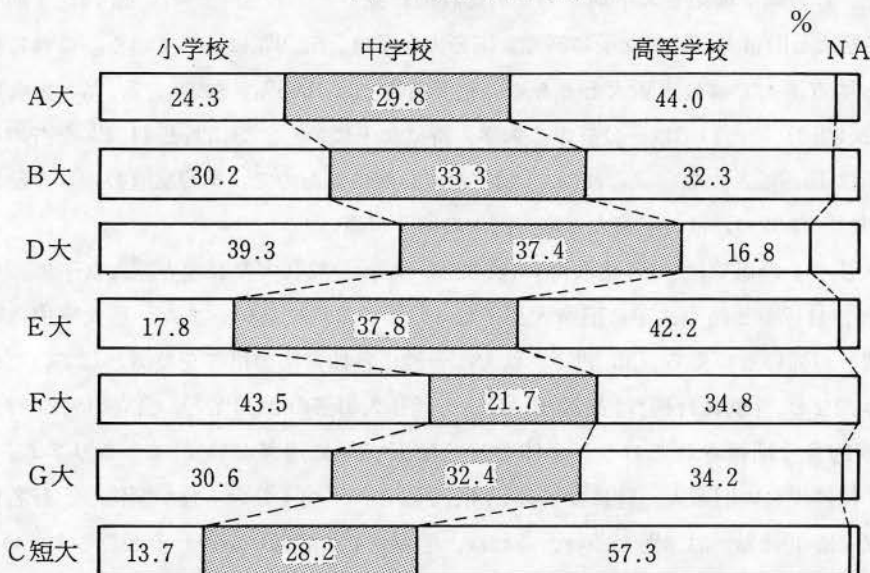
表31-3 進学決定時期＝中学校時

大 学 別	男子	女子	計
A 大	24.5	36.1	29.8
B 大	36.4	29.3	33.3
私 大 平 均	30.5	32.7	31.6
D 大	39.8	26.3	37.4
E 大	23.8	50.0	37.8
F 大	( )	11.1	21.7
G 大	—	32.4	32.4
国公立大平均	31.8	30.0	32.3
全 平 均	31.1	30.9	32.1
C 短 大	—	28.2	28.2

表31-4 進学決定時期＝高等学校時

大 学 別	男子	女子	計
A 大	50.7	36.1	44.0
B 大	36.4	26.8	32.3
私 大 平 均	43.6	31.5	38.2
D 大	17.0	15.8	16.8
E 大	47.6	37.5	42.2
F 大	( )	33.3	34.8
G 大	—	34.2	34.2
国公立大平均	32.3	30.2	32.0
全 平 均	37.9	30.6	34.1
C 短 大	—	57.3	57.3

図 13 進学決定時期



較的進学意欲が遅く現われた者で、状況、特に学業成績との関連で進学を決定したということである。

#### イ. 進学理由

大学生本人の進学理由は〈表 32-1〉のようである。ここで国公立大と私大との差は、後者に「資格取得」欲求が比較的強い他は大差ない。一方、短大の場合、「勉学希望」と「実力獲得」が7.7%及び4.3%と少なく、「就職有利」が27.8%と目立って多い。全体として「勉学希望」は4分の1と少なく、「実力」への志向も12.2%と低い、「勉学」「教養」「実力」など、人格形成面と、「資格」「就職」「社会入り不安（モラトリアム）」など、対社会メリットが相半ばしていて、現今大学生の実態を期せず示していると言える。特に注目すべきは、「モラ

表32-1 学生による「大学進学理由」複数回答 %

No	校 種 進学動機	大 学			短 大
		国公立	私 立	計	
1	勉学希望	26.3	24.5	25.7	7.7
2	教養必要	31.9	27.1	30.3	24.8
3	実力獲得	13.9	8.8	12.2	4.3
4	資格取得	19.7	35.3	24.9	28.2
5	就職有利	12.9	14.8	13.5	27.4
6	社会入り不安	24.5	25.0	24.6	23.9
7	親の勧め	7.5	6.1	7.0	8.5
8	友人の進学	0.7	3.2	1.5	4.3

注) 社会入り不安＝モラトリウム

トリウム」の24.6%で、これは学習意欲低下と関係するところ大であろう。

ところで、この進学理由を大学別・男女別に詳細に見ると(表32-2～7、図14)、「勉学希望」が有名私大と旧帝大、特に女子に高く、旧帝大女子は、57.9%に達している。これに対し、一般私大と地方国大では公立短大とともに「勉学希望」は10.5%、8.9%、7.7%と少ない。「教養」(表32-3)については、公立の2大学、特に女子に多く、33.3%と41.4%を占めるが、旧帝大女子は15.8%と少ない。これは、「勉学希望」が多いため、学習意欲の強さを示している。「実力」(表32-4)は、旧帝大と地方国大の男子が高い。

対社会メリットの点では、「資格取得」(表32-5)が、一般私大及び地方国大女子に、それぞれ50.6%、41.7%と高く、逆に旧帝大男子は4.5%と非常に低い。また、私大学生に特に「資格希望」が強いといえる(35.3%)。私大は一般に各種資格の付与を特徴としているからであろう。なお、「就職有利」(表32-6)は、一般私大男子の23.0%と、公立短大の27.4%にのみ比較的多く期待されており、全体としては13.5%に過ぎない。「モラトリウム」(表32-7)は、特に少ない旧帝大、殊に女子の5.3%を除き、平均4分の1強が関係し、有名私大男子や公立大に30.9%、31.4%と多い。これは、学習意欲の高低にかかわるところ大きい。

表32-2 進学理由＝勉学

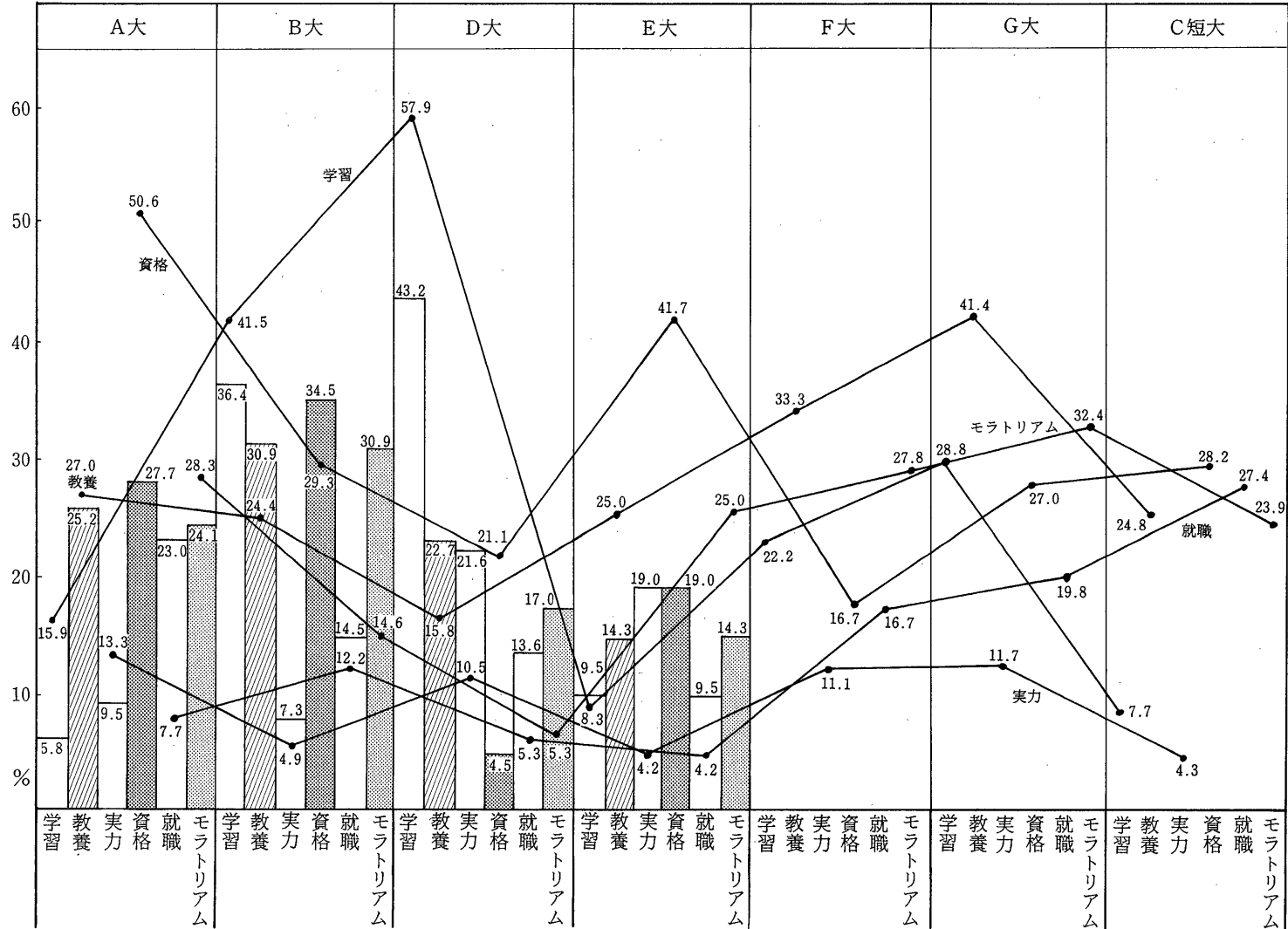
大 学 別	男子	女子	計
A 大	5.8	15.9	10.5
B 大	36.4	41.5	38.5
私 大 平 均	21.1	28.7	24.5
D 大	43.2	57.9	45.8
E 大	9.5	8.3	8.9
F 大 ( )		22.2	21.7
G 大	—	28.8	28.8
国公立大平均	26.4	29.3	26.3
全 平 均	23.7	29.1	25.7
C 短 大	—	7.7	7.7

表32-3 進学理由＝教養

大 学 別	男子	女子	計
A 大	25.2	27.0	26.0
B 大	30.9	24.4	28.1
私 大 平 均	28.1	25.7	27.1
D 大	22.7	15.8	21.5
E 大	14.3	25.0	20.0
F 大 ( )		33.3	34.8
G 大	—	41.4	41.4
国公立大平均	18.5	28.9	31.9
全 平 均	23.3	27.8	30.3
C 短 大	—	24.8	24.8

図 14 大学別・男女別進学理由対比

棒グラフ——男子  
折れ線——女子



現今大学生の学習意欲に関する一考察 (3)



表32-4 進学理由＝実力

大学別	男子	女子	計
A 大	9.5	13.3	11.2
B 大	7.3	4.9	6.3
私大平均	8.4	9.1	8.8
D 大	21.6	10.5	19.6
E 大	19.0	4.2	11.1
F 大	( )	11.1	13.0
G 大	—	11.7	11.7
国公立大平均	20.3	9.4	13.9
全平均	14.4	9.3	12.2
C 短大	—	4.3	4.3

表32-5 進学理由＝資格取得

大学別	男子	女子	計
A 大	27.7	50.6	38.3
B 大	34.5	29.3	32.3
私大平均	31.1	40.0	35.3
D 大	4.5	21.1	7.5
E 大	19.0	41.7	31.1
F 大	( )	16.7	13.0
G 大	—	27.0	27.0
国公立大平均	11.8	26.6	19.7
全平均	21.4	31.1	24.9
C 短大	—	28.2	28.2

表32-6 進学理由＝就職有利

大学別	男子	女子	計
A 大	23.0	7.7	16.0
B 大	14.5	12.2	13.5
私大平均	18.8	10.0	14.8
D 大	13.6	5.3	12.1
E 大	9.5	4.2	6.7
F 大	( )	16.7	13.0
G 大	—	19.8	19.8
国公立大平均	11.6	11.5	12.9
全平均	15.2	11.0	13.5
C 短大	—	27.4	27.4

表32-7 進学理由＝モラトリアム

大学別	男子	女子	計
A 大	24.1	28.3	26.0
B 大	30.9	14.6	24.0
私大平均	27.5	21.5	25.0
D 大	17.0	5.3	15.0
E 大	14.3	25.0	20.0
F 大	( )	27.8	30.4
G 大	—	32.4	32.4
国公立大平均	15.7	22.6	24.5
全平均	21.6	22.2	24.6
C 短大	—	23.9	23.9

表32-8 高校教員による「大学進学理由」判断（複数回答） %

順位	理由	%	順位	理由	%
1	就職有利	62.5	9	勉学希望	29.2
2	実力獲得	56.3	10	進路選択	27.1
3	資格取得	52.1	11	生活充実	25.0
4	将来意味	50.0	12	自由性	25.0
5	親の勧め	43.8	13	友人の進学	22.9
6	専門学習	41.7	14	クラブ活動	14.6
7	教養必要	35.4	15	新しい友人	10.4
8	社会入り不安	35.4			

これらを、高校教員の見方（表 32-8）と対比すると〈図 15〉のようになる。これによると、大学生の意識に比して高校教員の認識が過大で、学生が冷めているとさえ言える。しかし、これは高校生時の意識の高揚と甘えが与える印象でもあろう。従って、この「実力獲得」「専門学習」への意志は進学後現実化し冷却化したということになる。その原因が大学の実態であるとするれば、前稿〈表 25-1〉で見た「大学は期待外れ」全平均 25.9%という高さが問題になる。

しかも、プラス評価としての「大学での学習効果」（表 25-4）中、「学問への興味」は 20.4%、「教養知識の増加」は 17.2%、「思考力の向上」は 12.7%にしか評価されていない点、留意が必要であろう。大学が勉学意欲を損なっていることになるからである。

一方、逆に高校時の進学理由の「クラブ活動」14.6%や「新しい友人」への期待 10.4%は、前稿の「サークル活動」38.2%（表 26-2）や「友人との交際」21.4%（表 26-4）で見たとおり、大学で大幅に満たされていることになる。大学は、そういう機会の提供機関の意味を持ったのであろう。「勉学希望」に関し、高校時の 29.2%と進学後の 25.7%が、学習意欲と結び付く妥当なラインであろうか。結局、学習意欲を持つ者は 3 分の 1 以下ということになる。

ウ. 大学生の価値観

これについての大学生の意識は〈表 33-1〉のとおりである。1 位の「幸福」49.6%と 2 位の「自己実現」39.3%は人生の目標でもあり当然の認識であろう。しかし、全体としては、4 位の「趣味的生活」28.4%、5 位の「安定」22.0%、7 位の「平凡」13.4%など安定志向が強

図 15 大学進学理由の高校教員判断と大学生の対比

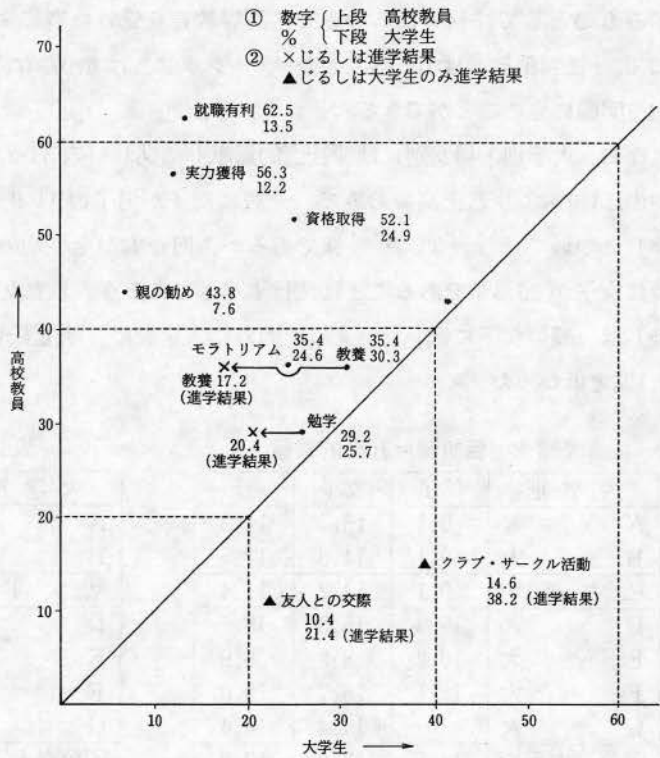


表33-1 学生による「価値観」複数回答 %

順位	校 種 価値内容	大 学			短 大
		国公立	私 立	計	
1	幸福	51.9	44.9	49.6	65.0
2	自己実現	39.9	38.0	39.3	28.2
3	創造力	31.7	33.8	32.4	24.8
4	趣味的生活	25.2	34.8	28.4	31.6
5	安定	22.3	21.4	22.0	42.7
6	ユニークさ	17.7	27.3	20.9	17.9
7	平凡	12.7	14.8	13.4	18.8
8	社会的貢献	13.8	11.4	13.0	12.8
9	批判精神	11.8	8.7	10.7	0.9
10	富	9.5	8.4	9.1	0.9
11	リーダーシップ	5.1	7.7	6.0	0.9

い。そして僅かに見られる個人的特性の「創造力」32.4%、「ユニークさ」20.9%が意欲に繋がるものとして注目されるのみで、高等教育を受けた者に期待される「社会的貢献」は僅か13.0%、「批判精神」は10.7%、「リーダーシップ」は6.0%なのである。そこに学習意欲低下要因を明確に見ることができる。

なお、大学別・男女別には「社会的貢献」に関し（表33-2）、旧帝大男子が19.3%と、計平均の13.0%より若干高いのみで、一般に女子が男子の11.9%に対し19.5%と高い。「批判精神」については（表33-3）多様であるが、旧帝大が全平均の10.7%に対し、22.4%と高く、特に女子が26.3%であることは注目すべきであろう。公立女子大及び短大は微少で、「批判精神」は一般に女子に低いといえる。因みに、全般に「地位」や「名誉」への価値観は、ともに4.1%と低かった。

表33-2 価値観＝社会的貢献

大 学 別	男子	女子	計
A 大	9.1	13.7	11.2
B 大	9.1	14.6	11.5
私 大 平 均	9.1	14.2	11.4
D 大	19.3	15.8	18.7
E 大	10.2	8.3	8.9
F 大	( )	16.7	13.0
G 大	—	14.4	14.4
国公立大平均	14.8	13.8	13.8
全 平 均	11.9	19.5	13.0
C 短 大	—	12.8	12.8

表33-3 価値観＝批判精神

大 学 別	男子	女子	計
A 大	6.2	5.6	5.9
B 大	14.5	7.3	11.5
私 大 平 均	10.4	6.5	8.7
D 大	21.6	26.3	22.4
E 大	14.3	4.2	8.9
F 大	( )	5.6	13.0
G 大	—	2.7	2.7
国公立大平均	18.0	9.7	11.8
全 平 均	14.2	8.6	10.7
C 短 大	—	0.9	0.9

## エ. 性格

学習意欲への「性格」の影響は否定できないであろう。アンケートによる大学生の「自己評価」は〈表34-1〉のとおりである。なお、自己評価は、日本人の文化的特性から、全体に自己卑下的・反省的であることを否めない。1位の2次発生的意欲の「負けず嫌い」47.6%を除くと、○印で示した、以下、2位「怠け者」、5位「ルーズ」、6位「飽きっぽい」、7位「消極的」、8位「神経質」、9位「短気」と、上位25%以上水準の多くが「意欲」の高さに結び付かないものである。特に「消極的」28.8%は悲観的とさえ言える。就中、旧帝大男子の場合「消極的」（表34-3）が47.7%に及び、逆の「積極的」（表34-2）が地方国大女子の12.5%に次いで19.3%と低い。因みに、同女子も「消極的」が36.8%に及ぶ。従って、僅かに有名私大で34.4%が「積極的」であることが注目される。特に女子は「消極的」が9.8%のみで、旧帝大学生と大きな差を持っている。

このような形で意欲につながる重要な「積極的」性格は24.8%、「行動的」は15.7%、「情熱的」は13.8%、「冒険心」は13.7%に過ぎない。これに、「明るい」30.2%、「外向的」23.6%、「根気あり」20.0%を加えても、全体的に大学生が性格上意欲的集団とは言えないよ

表34-1 学生による「自己の性格評価」複数回答 %

順位	性 格	%	順位	性 格	%
1	負けず嫌い	47.6	13	積極性	24.8
②	怠け者	33.4	14	凡帳面	24.1
3	責任感あり	32.2	15	外向的	23.6
4	明るい	30.2	⑬	調子者	22.4
⑤	ルーズ	29.2	17	我慢強い	21.7
⑥	飽きっぽい	29.1	⑮	依頼心	21.3
⑦	消極的	28.8	19	根気あり	20.0
⑧	神経質	27.4	⑳	軽率	16.1
⑨	短気	26.1	21	世話焼き	16.1
10	温和	26.1	22	行動的	15.7
11	内向的	25.6	23	社交的	15.6
12	協調性	25.3	24	情熱的	13.8
			25	冒険心	13.7
			26	勇敢	3.5

表34-2 性格＝積極的

大 学 別	男子	女子	計
A 大	23.7	21.9	22.9
B 大	34.5	34.1	34.4
私 大 平 均	29.1	28.0	28.7
D 大	19.3	26.3	20.6
E 大	33.3	12.5	22.2
F 大	( )	27.8	26.1
G 大	—	22.5	22.5
国公立大平均	26.3	22.3	22.9
全 平 均	27.7	24.2	24.8
C 短 大	—	22.2	22.2

表34-3 性格＝消極的

大 学 別	男子	女子	計
A 大	20.0	18.9	19.5
B 大	25.5	9.8	18.8
私 大 平 均	22.8	14.4	19.2
D 大	47.7	36.8	45.8
E 大	38.1	20.8	28.9
F 大	( )	33.3	34.3
G 大	—	25.2	25.2
国公立大平均	42.9	29.0	33.5
全 平 均	32.8	24.1	28.8
C 短 大	—	12.8	12.8

うである。結局、47.6%に及ぶ「負けず嫌い」だけが学習を進めさせるとすれば、問題が残ろう。

#### オ. 家庭状況

これらの大学生の価値観や性格を形成した家庭の教育状況はどうであろうか。

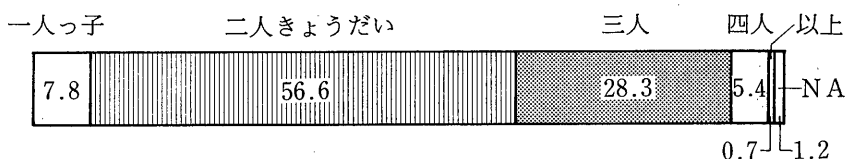
#### ア. 両親の性格・行動

教育環境として重要なこれは、大学生のアンケート回答「両親のイメージ」によれば〈表35-1〉のようになる。これを見ると、父親の「気まぐれ」22.8%や母親の「口うるささ」36.7%、「世話焼き」30.3%を除けば、程度問題ではある

表35-1 学生による「両親の性格・行動」複数回答 %

性格など	父 親		母 親	
	順位	%	順位	%
優しい	1	37.9	2	37.8
勉強家	2	29.2	8	13.8
気まぐれ	3	22.8	6	18.0
明るい	4	22.4	1	44.2
口うるさい	5	18.1	3	36.7
社交的	6	17.5	5	24.0
甘い	7	17.4	9	11.0
世話焼き	8	17.3	4	30.3
活動的	9	17.2	7	17.5
民主的	10	14.3	10	10.7

図16 同胞数



が、他に提示した選択肢「冷淡」2.5%、「暗い」2.7%、「無知」4.0%、「怖い」5.4%、「センスがない」3.5%、が少なく、全体として恵まれた両親の許で育ったものと言えよう。ただ、父親の「勉強家」29.2%は評価できて、両親共「活動性」では17.2%及び17.5%と低く、また、最上位の「優しさ」37.9%(父親) 及び 37.8%(母親) に加えた「甘さ」は、逆に家庭が温室的であったことを否定できない。なお、きょうだい数は〈図16〉のとおり少子家庭である。

#### b. 大学生による家庭教育回顧

これについて整理すれば〈表35-2〉のようになり、ここでも一応優れた家庭教育を見ることができる。特に左側に整理したプラス傾向を見ると、「勉強奨励は少なかった」ようであり(50.9%)、「努力工夫評価」が17.1%と一応見られる。ただ、「成績席次関心少なし」は22.1%、「家事手伝い」は8.7%と少ないが、これは今日の家庭の現実であろう。一方、マイナス傾向の「競争心喚起」50.9%と「比較による奨励」18.9%及び「過期待的」46.3%は、自発的意欲の育成には障害

表35-2 学生による「家庭教育回顧」複数回答 %

(＋)		(－)	
親との会話多し	50.9	褒美による奨励	3.0
親との行動多し	18.4	将来懸念の奨励	6.0
よく誉められた	25.4	比較による奨励	18.9
よく励まされた	25.0	競争心喚起	50.9
よく叱られた	33.9	過期待的	46.3
勉強奨励少なし	50.9	教員批判	6.0
成績席次関心少なし	22.1	成績出来高小遣	1.3
努力工夫評価	17.1	家庭教師利用	7.0
芸術面も評価	12.8	学習費用厭わず	24.3
家事手伝い	8.7	勉強中機嫌よし	22.7
(男子)	5.7		
(女子)	12.2		

表35-3 学生による「塾学習回顧」複数回答 %

自己意志通塾	39.7	良い先生	16.6
親の勧め	15.5	学習有効	28.5
合 計	55.2	楽しさあり	5.1
		辛かった	6.1

となったであろう。勿論、「褒美による奨励」3.0%や「成績出来高小遣」1.3%、「将来懸念の奨励」6.0%、「教員批判」6.0%が少なかった点は注目される。「通塾」は、〈表35-3〉のように自己意志で開始し、学習効果も、良い教師との出会いを含めて評価されており、「辛さ」は6.1%にしか感じられていない。但し、通塾そのものが持つ問題性は否定できない。



カ. 大学生による学校時代回顧

a. 小学校時代

〈表 36-1〉に見るように、強いて上げるべき学習意欲へのマイナス要因はない。結局教員個々の指導が意欲喚起的であったかどうかということになるが、これについては今回の調査では不明である。

b. 中学校時代

ここでも適度のプラス体験がなされており、マイナス事項としては「規則の厳しさ」34.3%と「管理的指導」6.3%、「暴力警戒的姿勢」7.4%による主体性・自発性の抑圧が考えられるだけである。「校内暴力」体験の13.4%は一応留意しておく。

c. 高等学校時代

受験態勢が生む諸問題の他は、特記すべき学習意欲妨害要因はない。ただ、「苦手科目の明確化」64.3%は「劣等感あり」14.7%とともに、意欲上問題であろう。特に「受験学習に疑問」をもった19.2%は、一面で真の学習への意欲向上を期待させつつも、他面で意欲喪失を招いたであろう。それが「学習方法の悩み」12.6%に繋がっているとも言える。特に進学後も「勉強法不明」者が14.4%も

表36-1 学生による「小学校時代回顧」複数回答 %

(＋)		(－)	
良い先生	64.8	登校拒否	13.3
遊び多し	48.0	体罰体験	12.0
親の授業参観	43.2	いじめ体験	9.0
友人多し	41.8		
学習自信あり	38.9	鍵っ子	3.1
読書多し	35.0		

表36-2 学生による「中学校時代回顧」複数回答 %

(＋)		(－)	
友人多し	54.5	規則厳格	34.3
学級委員体験	53.3	管理的指導	6.8
自立的生活	40.3	校内暴力あり	13.4
スポーツ熱中	36.4	暴力警戒的姿勢	7.4
テレビ視聴多し	33.3	学校に反抗的	7.6
音楽愛好	30.4	家出の気持あり	8.4
異性への関心	27.1	登校拒否	0.9
(男子)	39.4	勉強の悩み	4.5
(女子)	18.0	受験の悩み	10.0
理解有る先生	25.6		
上手な先生	17.7		
熱心な先生	10.6		

表36-3 学生による「高校時代回顧」複数回答 %

受験教育熱心	51.5	授業騒がし	15.9
(国立)	59.6	(国立)	11.1
(私立)	35.4	(私立)	25.6
能力別編成校	22.8	サボ学生多し	19.7
宿題多し	19.6	校内暴力あり	0.1
真面目な生徒	44.5	アルバイト	19.8
勉強努力	23.0	(国立)	11.4
読書多し	29.5	(私立)	36.8
新聞に留意	17.5		
友人と議論多し	16.5	受験学習に疑問	19.2
クラブ熱心	40.1	学習方法に悩み	12.6
深夜ラジオ	23.8	苦手科目明白	64.3
音楽愛好	18.1	劣等感あり	17.7
体型に関心	19.7	中退を考える	4.1
(男子)	7.0	自殺を考える	8.7
(女子)	24.3		

あることは注意されねばならない（前稿，表 25-3，学生回答）。

こう考えてくると，大学入試制度の生み出した諸問題が学習意欲を阻害していることを否定できない。従って，入試制度の抜本的改革があく迄も求められるが，それは他で私案を展開することとして<sup>2)</sup>，これらの問題に対処する日常的教育活動で，大学及び大学人は各種の考案と具体的実践を計るべきことになる。

## 6. 学習意欲喚起の方策

学習意欲低下要因の各種検討の結果，大学は結局自らの教育態勢を改善し，学生の意識を既述の問題点に関して改革し，意欲的な学習生活を積極的に推進するよう接触・指導する以外はないことになる。

### a. 私語を防ぐ実践

では，これまで，どのような対応がなされてきたのであろうか。大学教員へのアンケート結果では，例えば，「私語」については〈表 37-1〉のような実践がなされている。このうち，管理的には，1位の「注意・指導」が31.4%と多く，特に私大では，授業中の叱責が36.0%にも達している。そして，「退出指示」13.3%や「名前チェック」10.5%が続く。私大の場合，特に多人数講義が多い為，「名前チェック」が国公立大の3.3%に比し，13.3%にも及んでいるわけである。なお，「座席指定」6.7%，「友人との同席禁止」1.9%も少ないながらある。

一方，教育的対処としては，特に「講義を魅力的に」が28.6%，「質問による緊張」が

表37-1 大学教員による「私語を防ぐ実践」複数回答 %

順位	校 種 方 法	大 学			短 大
		国公立	私 立	計	
1	注意・指導	20.0	36.0	31.4	45.8
2	講義を魅力的に	43.3	22.7	28.6	45.8
3	質問による緊張	16.7	20.0	19.0	29.2
4	退出指示	13.3	13.3	13.3	12.5
5	目的意識育成	16.7	12.0	13.3	12.5
6	課題提示	10.0	10.7	10.5	25.0
7	名前チェック	3.3	13.3	10.5	12.5
8	発表・討論機会	3.3	10.7	8.6	12.5
9	評価を厳しく	13.3	6.7	8.6	8.3
10	パフォーマンス構成	0	12.0	8.6	4.2
*	私語は不可避	3.3	14.7	11.4	12.5

その他，「各種試みも効果なし。防ぎ様なし。自分の学生時代も私語した」という意見あり。

\* 数少ない他の方法として…… 普段のラポール努力，小人数クラス編成，自浄作用に働きかける，友人との同席禁止，座席指定，全教員の協力，などあり。

19.0%、「発表討論機会」が8.6%ある。この他、「課題提示」10.5%、「評価を厳しく」8.6%など、学習への緊張を誘い、努力を高める試みは種々なされている。また、更に授業技術として「パフォーマンス構成」8.6%や「普通のラポール」醸成6.7%など日常的努力も見られており、「全教員の協力」を申し合わせた大学が、1.9%ながら有る。しかし一方、「自浄作用に待つ」の3.8%と「各種試みも効果なし」の2.9%があることを無視することはできない。全体としては、「私語は不可避」と14.7%が見る私大教員が国公立大教員以上の多様な努力を求められていることになる。国公立大は私語を不可避とする者が3.8%のみだからである。「パフォーマンス」実践はその差の最たるもので、国公立大のゼロに対し、12.0%迄もなされている。国公立大は「講義を魅力的にする」ことで効果が生まれたり、「評価を厳しくする」ことが一般的に行なえるのに対し、私大は内容を「魅力的にする」だけでは及ばぬ点もあれば、「評価を厳しく」しては、授業が展開しない面もあるのであろう。

なお、中高教員は、既述のとおり、改善点を〈表37-2〉のように提起し、特に「単位取得を厳しく」「講義を魅力的に」することをそれぞれ37.3%、29.1%と求めている。

結局、大学は今や大学生が現実を持つ意識に基盤を置いて、教員自身自己努力するより他はない。その一つの方法が、アメリカでの「学生による授業評価」の試みであり、日本でも若干行なわれ始めている同種のものである。しかし、日本では、殆どの大学教員の姿勢が、授業の学生による評価に向けては

熟していない。また、学生達がそうした評価を正しく行なえるかどうかには問題がある。つまり、信頼関係の問題であるが、学生の比較的安易につく自己中心的判断が危惧されるのである。

従って、別法として、教員側の自己反省のみが、学習意欲喚起の実施可能な方法となる。そのため、既に『授業改善視点表』の作成が、例えば、前々稿で紹介した坂元昂らによって試みられている。これらを前例として、今、教員それぞれが何らかの、授業に関する自己改善項目を設定することが必要であろう。そして、その適切な作成のために、学生達の授業への一般的な受け取り方を確認する必要がある。そのために、ここでは「学習意欲の湧く授業内容」と「学習意欲の湧く授業方法」についてもアンケート調査を行なった。それが前稿でも付記した次の2表（28-1～2）である。

#### b. 授業内容

まず、今学生は「ユニークさ」と「教員の人柄」を1・2位として、53.3%と49.9%評価しており、これに13位の「迫力」18.9%、17位の「思想の明確さ」12.1%を加えれば、そこに講義者の望ましい全体像が描き出される。以下、講義に関し「理解容易」で「余談の多い」

表37-2 中高教員による「学習意欲喚起方法提案」

順位	方 法	%
1	単位取得を厳しく	37.3
2	講義を魅力的に	29.1
3	マス・プロ廃止	26.4
4	一般教養改善	14.5
5	指導力増強	11.8
6	カリキュラム改善	9.1
7	オリエンテーション強化	3.6
8	指定科目削減	3.6

表28-1(再掲) 学生による「学習意欲の湧く授業内容」複数回答 %

順位	校 種 内 容	大 学			短 大
		国公立	私 立	計	
1	ユニークさ	53.1	53.6	53.3	65.0
2	教員の人柄	50.2	49.2	49.9	56.4
3	理解容易な講義	49.4	45.5	48.1	63.2
4	余談の多い講義	43.9	34.3	40.7	47.0
5	要点の明確さ	30.5	38.8	34.9	43.6
6	ノートし易さ	32.9	38.0	34.6	53.8
7	現実問題に言及	32.2	28.1	30.8	18.8
8	単調でない講義	30.6	28.6	29.9	36.8
9	記憶より理解	23.8	35.0	27.5	24.8
10	思考を触発	23.8	35.0	27.5	24.8
11	豊かな内容	24.4	24.9	24.6	17.1
12	具体例多し	22.8	25.5	23.7	19.7
13	迫力	16.2	24.3	18.9	7.7
14	適当な早さ	17.1	19.9	18.0	19.7
15	学生心理に留意	15.7	17.5	16.3	23.9
16	基礎からの累積	15.3	17.5	16.0	9.4
17	教員の思想明確	12.0	12.3	12.1	3.4
18	説明の厳密さ	9.1	10.1	9.4	3.4
19	年間の流れ明確	6.7	13.4	8.9	5.1

表28-2(再掲) 学生による「学習意欲の湧く授業方法」複数回答 %

順位	校 種 方 法	大 学			短 大
		国公立	私 立	計	
1	音声明快	64.9	54.4	61.4	53.0
2	資料配布	48.7	50.2	49.2	41.9
3	教育機器活用	45.0	28.0	39.4	43.6
4	教科書使用	28.4	57.5	38.1	65.8
5	小人数授業	36.4	38.0	36.9	23.9
6	提出物の返却	30.2	45.6	35.4	17.9
7	板書多し	33.1	32.6	32.9	38.5
8	励ましある講義	21.0	25.7	22.6	25.6
9	発言発表機会	18.9	15.4	17.7	9.4
10	参考文献紹介	12.1	19.7	14.6	8.5
11	討論機会あり	13.2	17.1	14.5	6.0
12	雑談者を叱責	6.5	15.0	9.3	3.4
13	レポート多し	5.0	13.6	7.9	4.3
14	試験多く公正	6.3	9.3	7.3	1.7
15	指名質問あり	6.7	3.2	5.5	1.7
16	補講あり	1.5	1.5	1.8	2.6
17	試験評価厳しい	0.2	2.3	0.9	0

「要点の明確な」「ノートし易い」「現実問題に言及した」講義が30%以上で求められ、また「単調でない」「記憶より理解を重視した」「思考を触発する」「豊かな内容の」「具体例多い」講義が20%以上で求められている。以下10%台は「適度な進度」の「学生の心理に留意した」「基礎から累積された」講義であるが、以上、これらの評価率に従って、授業内容を構成することが学習意欲の喚起に繋がることになる。従って、18位の「説明の厳密さ」や19位の「年間の流れの明確さ」は余り問われないことになる。

#### c. 授業方法

これに関し、「音声の明快さ」が持つ重要性は61.4%と無視できない。また「資料配布」「教育機器の活用」「教科書使用」「板書」「参考文献紹介」等の条件設定が重要であることを示唆される。一方、「提出物の返却」「レポートの提示」の努力と、「励まし」「討論機会」「指名質問」の留意が意欲を喚起することになる。なお、「補講」や「評価の厳しさ」は、それぞれ1.8%, 0.9%と、寧ろ評価されないことに注意する必要がある。

#### d. 授業の『自己評価』視点・例

これらを通して、個人的に考案したものが以下の例である。

### 授業の『自己評価』視点・例

（\*は、重要と考えられるもの）

#### I 教育環境・設備・配慮

1. 受講生数に見合った教室、静かな空調、明るい照明
2. 広い黒板、低い教卓、掲示用マグネット、予備黒板、掲示ボード
3. 音響効果の優れたスピーカー、ワイヤレス・マイク、アナライザー
4. 視聴覚設備（暗幕、スクリーン）、OHP、ビデオ、プロジェクター、実物投影器
- \* 5. 適切な受講生数、座席間隔（友人と間を空ける余裕）、名札立て
- \* 6. 1 講義時間・60分程度（90分の場合は途中の休憩、ないしは気分転換の試み）

#### II 講義内容

- \* 1. 目標提示、モチベーション（興味・関心、目的意識、予測、仮説定立）
2. 理論の厳密さ、真理探究（学術性、深さ、多様さ、徹底性）
- \* 3. 学習法に関する指導（文献探索法、読書法、データ処理法、観察法など）、科学的見方の指導（比較・分析など）、学習ヒント、努力への価値観
4. 簡潔な用語、明快な概念規定（専門用語は最低必要なもののみ）、分かり易い表現
5. 適度の学問的引用（歴史言及を少なく、些事での引用無用）、参考資料・データなどの活用
- \* 6. 内容の精選、適度の量、要点の明示、必須事項の提示（明瞭さ、簡潔さ）
- \* 7. 理解容易な内容、学生の既知・既体験の活用、具体例（最近のトピック）、比喩、正誤範例



- \* 8. 学習及び生活への有用性, 現実的問題 (up-to-date, 社会関連), 応用例
- 9. 基礎からの大系性 (連続性, 一貫性), カリキュラムの流れ (目標との関連, 関連分野関係)
- \* 10. 1 講義毎のまとめり (前後との繋り, 復習と次時予告), 学習課題の提示, 期待の表明
- \* 11. 講義運びの起伏, 脱単調さ, ヤマ場, 感動的話題, 面白さ・楽しさ
- \* 12. 広い視野, 各種比較, 多彩で豊かな内容, 新味性, 学生の心理・反応・理解度による臨機の展開, リポート内容などの活用
- \* 13. 知的好奇心への刺激, 学習意欲の喚起, 問題提起的, 思考触発的, 批判的示唆, 活性化の配慮, 参加意識の醸成, 充実感, 理解重視 (記憶を越える)
- \* 14. 内容のユニークさ, 考え方・説明方法の独特さ, 創造性
- 15. 適切な数・内容の参考文献紹介

### III 講義方法

- 1. 視線, 講義位置・移動 (机間など), ジェスチャー, 適度のパフォーマンス
- \* 2. 話術 (会話調, 強弱, 抑揚, 生き生きと, リズミカル, 間, 速さ, 繰り返し), 説得的, 迫力, 熱情
- \* 3. 適度の余談, ウイット・ユーモア, 新知識, 不可思議感・懐疑性のある例話
- 4. メモ・ノートに頼らぬ確信的講義態度, ゆとり
- \* 5. 板書 (量, 形式, タイミング, 丁寧な字, 簡潔な表現, 適切な図解, 色チョーク)
- \* 6. 適切な教科書, 豊富な教材・教具 (実物, 標本, 掛図など)
- \* 7. 資料プリントの配布, 教育機器の活用 (OHP, ビデオ, プロジェクターなど)
- 8. 適度の発問, 小テスト, リポート課題提示
- \* 9. 提出物の返却, 評価の公正さ, 賞賛, 励まし, 共感, 注意・叱責
- 10. 個別指導, 適度の緊張, 主体的思考のための間, 参加意識, 達成体験
- 11. ノート・情報処理方法の指導
- 12. 質問しやすい自由なムード, 学生とのラポール, 講義開始および終了の時間的適切さ
- \* 13. 発表・討論機会, 共同活動場面 (リーダーシップの発揮), 多様なワークショップ活動

### IV 講義者自身

- \* 1. 身だしなみ, 態度, 人柄, 熱心さ, 親切, 温和, 接し易さ, 寛容性, 柔軟性
- 2. 音調・音量, 音声の明快さ, 口癖 (「エー」「アー」を含む) への留意
- 3. 思想・立場の明快さ, 論理性, 信頼性, 公正感
- 4. 大学・同僚・卒業生・在学生への暖かい目, 学生心理・意識・生活への理解, 激励的・啓発的姿勢, プライド付与的

V その他のプログラム例（学生の参加による共同推進）

- \*ビデオ・タイム（適宜上映）、 \*学部・学科ニュース（月刊ないし週刊）
- \*教育情報プレチン（掲示、リーフレット） \*教育参考館（室）の運営

結 び

拙稿(1)で先ず、児玉邦二武蔵野女子大教授の私語論を紹介した。彼の私語発生理由、①一方通行講義、②入試歴社会、③群れたがる習性、④退屈な講義場面、⑤学生の多忙さは、今回の調査でも概して正しいことが分かる。特に重要ポイントとして④が留意されるべきであろう。しかし、その前に「知的好奇心」を低下させ、「学習目的観」を喪失させた家庭教育・社会風潮、そして、これ迄の学校教育の欠陥も指摘されなければ不十分である。従って、児玉による解決法、①講義を魅力的にする。②時々叱って注意する、の二方法だけでは事態を積極的に改善するものとはならないであろう。寧ろ、大学は本質的・根底的に、知的好奇心や学習目的観の回復から始めなければならない。その面での説得性を増すような講義でなければ、安易に配慮を加えただけでは問題を解決しないままに終るであろう。勿論、体制としての入試方法改革の重要性も再確認されるべきである。

前々稿では亦、亜細亜大学の衛藤藩吉学長の「私語追放運動」通達と違反者処分の対応も見た。そこで触れられた1講義時間90分の長さは、調査結果でも学生の感覚として問題性があることが明らかとなった。しかしこれが、単に講義開始の多少の遅延や、講義終了時間の切り上げという形で短縮されるのではなく、寧ろ、時間割変更や、学期制、カリキュラム制度の改変に迄至る必要があることを留意しておきたい。なお、衛藤の「棒読み・講演口調の講義」批判は、大学教員の教授法研究を方法的・積極的に勧めなければ、弥縫策に過ぎないことになる。

なお、私語の程度には、明らかに大学差があり、一般に入学者数の少ない国公立大では私語が少ないことは明らかである。また、その故に、私語せずに聴講できる習慣ないしは姿勢が偏差値の高さに関連していることも一応言えるだろう。しかし、私語しないことが、即積極的学習になっているかどうかは、直列には言えないのであった（前々稿）。つまり、有名私大女子に例を見る如く、意欲その他積極性は、一律ではないが、この辺りに期待できることも分かった（同上）。本質的には、学習への好奇心や進学目的観にそれが依存しており、旧帝大に見るように、社会的貢献への意志が、習慣や姿勢の背景にあって初めて私語の少なさに繋がることになる。

最後に、第1稿で提起した「学習意欲低下の要因仮説」も殆ど間違いないことが判明した。唯一仮説が妥当しなかったのは、⑧の「校内暴力による学習習慣の欠落」であった。校内暴力は従来の学校教育からは予想できぬ驚天動地のことであったが、比率的に1部のことであった上、人間の一般的な秩序感から傷を深くしなかったものと言えるのであろう。実際には、その

事件を越えるほどに、学歴社会の体制が生育期の青少年により大きく既に問題を与えているからと言って良いであろう。

いずれにしろ、仮説上の、⑤「大学側対応の遅れ」が際立つことを注意しなければならない。その意味で、②の「偏差値重視・管理主義教育」が体制となったのであり、③「経済の主導性」や、⑦「マスメディア」に乗り越えられたのである。大学は、若者の最終学校段階を担う立場から、若者の問題状況を正確にとらえ、家庭や社会に対し、④「努力に対する評価」を回復し、個性を生かしつつ「社会に貢献」するような「批判精神」を育成することの重要性を語りかけ、⑥「大人による社会倫理教育の失敗」を引き続き傍観することのないよう働きかける必要がある。

(1991. 9.19)

注

- 1) この統計から、女性（母）1人当たりの出生数を計算すると2.34人になる。
- 2) 『佛教大学研究紀要』76号（1992. 3.14 発行予定）で「『汎学習社会』に向かう高等教育改革の構図」を発表する予定である。
- 3) アンケート調査実施のためには、佛教大学学会から助成費を得た。ここに感謝の意を表したい。

大学生の学習態度に関するアンケート（注、大学教員対象）

吉 岡 剛

\*該当項目に「マルじるし」をお付けください。また（ ）内に必要に応じて御記入をお願い致します。

I 回答者の勤務大学と対象学生、そして御自身について

1. …… 1. 国立大学 2. 公立大学 3. 私立大学 4. 国公立短期大学  
5. 私立短期大学
2. 主たる対象 …… （ ）学部（ ）学科（ ）回生。
3. 対象学部・学科の入試状況  
〈倍率〉\_\_\_\_\_倍。  
〈難易度〉（入試情報誌などで判断すれば……）  
1. 非常に難しい 2. 難しい 3. 普通 4. 易しい
4. 対象学生数（約 \_\_\_\_\_）名（内、女子・約 \_\_\_\_\_名）。
5. 回答者年齢 …… 60歳以上, 50歳台, 40歳台, 30歳台, 29歳以下。
6. 主要担当科目・例（ \_\_\_\_\_）。
7. 大学での教育経験 …… （ \_\_\_\_\_）年。

II 学生の受講実態について

1. 講義中、学習意欲の認められる学生 ……  
1. 全員 2. 3分の2 3. 半分 4. 3分の1 5. （ \_\_\_\_\_）
2. 受講登録者中、講義出席者は普通 ……  
1. 全員 2. 3分の2 3. 半分 4. 3分の1 5. （ \_\_\_\_\_）
3. 学生の座席の取り方 ……  
1. 前から座る。 2. 比較的前に詰めている。 3. 平均して座っている。  
4. 前の方が少ない。 5. 満席。
4. 講義時間に遅刻する者（1例として、\_\_\_\_\_時開始のもの、出席者\_\_\_\_\_人中）  
1. 非常に多い 2. 多い 3. 普通（\_\_\_\_\_人位） 4. 少ない 5. いない
5. 途中退席者 ……  
1. 非常に多い 2. 多い 3. 普通（\_\_\_\_\_人位） 4. 少ない 5. いない
6. 講義中居眠りする者 ……  
〈午前〉 1. 非常に多い 2. 多い 3. 普通（\_\_\_\_\_人位） 4. 少ない

5. いない

〈午後〉 1. 非常に多い 2. 多い 3. 普通 ( \_\_\_人位) 4. 少ない

5. いない

7. 講義中他の事(所謂・内職)をしている者 ……

1. 非常に多い 2. 多い 3. 普通 ( \_\_\_人位) 4. 少ない 5. いない

8. 講義中私語する者 ……

1. 非常に多い 2. 多い 3. 普通 ( \_\_\_人位) 4. 少ない 5. いない

9. 一般に私語の多い授業(演習・講読・実験・実習以外)は? ……

1. 大教室の授業 2. 多人数の受講生 3. 休日後の授業

4. ( ) 講時の授業 5. 出席を取る授業 6. 出席を取らない授業

7. 座席指定のない授業 8. 必修科目 9. マイク講義

10. 声の通らない講義 11. 教科書使用の講義 12. 実際的有用性のない講義

13. 資格など取得のための講義 14. 男子学生の多い授業

15. 女子学生の多い授業 16. 難しい講義 17. 内容のない講義

18. 独り善がりの講義 19. 散漫な講義 20. 話術の下手な講義

21. 余談の多い講義 22. 黒板を余り使わない講義 23. 単調な講義

24. 思考を触発しない講義 25. 指名して質問をしない講義

26. 注意や叱責をしない先生 27. 女性の先生 28. 性格の温和な先生

29. ぞんざいな先生 30. 尊敬できない先生 31. 非常勤の先生

32. 試験や評価の甘い授業 33. レポート提出や小テストを余りしない授業

34. その他 ( )。

III 欠席, 遅刻, 早退をどのように扱っていますか?

1. 出席を厳しく取することで少なくする。

2. すべて届出制にしている。

3. 目に余ると注意したり叱ったりする。

4. 途中の入室や退室を許さない。

5. 座席を指定して座席表で指名を確認する。

6. 講義の前後に, 或はどちらかで小テストなり小作文を書かせる。

7. 指名して質問をするなどして出欠を確認する。

8. 学生の自由にさせておく。

9. レポート提出など課題を出して, 欠けた分を補わせる。

10. 評価を厳しくすることで自省させる。

11. 遅刻・早退は, 例えば3回を1回の欠席と見なすなどしている。



12. 授業内容を魅力的にするよう努力する。
13. 授業方法を多様化して聴講に興味を持たせる。
14. 出来るだけクラスを小人数編成にする。
15. 出席状況・成績などを親に直接通告する。
16. その他 ( )。

IV 私語を防ぐために、どのようなことを試みていますか？

1. 友人と離れて座るよう指導する。
2. 座席を指定し、私語者の氏名が分かるよう座席表を教師が持つ。
3. 小人数クラス（\_\_\_人位）にする。
4. 講義中度々質問して緊張を持続させる。
5. 時々注意して、大学生としての恥を知るよう説得する。
6. 叱りつけたり名前をチェックしたりする。
7. 教室の外に出よう指示する。
8. 関係教員全員が各担当授業で私語を許さない姿勢をもつ。
9. 授業内容を魅力的にするよう努力する。
10. 普段から問題意識を育てるように努める。
11. 課題を度々だし、学習内容に注意を引き付ける。
12. 授業の仕方をパフォーマンス的に組立てる。
13. 学生に発表や討論の機会を持たせる。
14. 試験を難しくし、評価も厳しく行なう。
15. 普段から学生と接触してラポールを高めておく。
16. 学生間での自浄作用を期待して、心ある学生に働きかける。
17. いろいろ試みてみるが、効果が現われないので、半ば諦めている。
18. 防ぎ様がないので敢えて直そうとは考えない。
19. 大衆大学水準に達した日本の大学では不可避の傾向である。
20. 自分たちが大学生のときも、今の学生と同じだった。
21. その他（

V 成績評価はどのようにしていますか？

1. 百分率で表わすと …… 80 点以上 (約\_\_%)      70 点以上 (約\_\_%)  
60 点以上 (約\_\_%)      不合格 (約\_\_%)
2. 評価に組み込むもの ……
1. 出席率      2. レポート提出      3. 小テスト      4. 授業中の小作文

5. 学期末試験    6. 年度末試験    7. 年度末レポート
3. レポート提出や小テスト・授業中の小作文などは、半期で何回求めますか？
- ① 全く求めない    ② 1回    ③ 2回    ④ 3回以上    ⑤ 毎日
4. 不合格者の扱い ……
1. 翌年度再受講して再試験
  2. 再試験（乃至はレポート提出）の機会を与える。
  3. 最終学年の試験ないしは卒業時の特別試験で決定する。

VI 学習意欲の低下原因として、どんなことが考えられますか？

〈本人〉

1. 不健康・体力の無さ
2. 本人の学力不足
3. 無目的進学
4. 本人の劣等感
5. 知的好奇心の低下
6. 学習方法についての無知
7. 努力・勤勉等への価値観の崩壊
8. 無関心・無気力・無感動
9. 就職のためと見る大学観
10. 第二・第三志望大学への入学
11. 自立への意識の欠如
12. 確固たる社会観の欠如
13. 人生目的・目標の未成熟さ
14. 校内暴力体験の後遺症
15. 異性への関心・悩み
16. 自己中心の勝手主義
17. 資格や有用性を重視する即物主義
18. 進学時の学部専攻選択ミス
19. 慣れあいの友人
20. 友人関係の悩み
21. ルーズな生活態度
22. アルバイトへの没頭
23. 通学や自炊など雑事の繁忙さ
24. 金銭的不安
25. 多忙すぎるクラブ・サークル活動の疲労
26. エネルギー発散の機会不足
27. 親や教師の指示待ち姿勢
28. 充実した学習体験の欠如
29. 入試勉強による消耗や反動
30. 大学合格が生んだ安堵感と空白感
31. スポーツ愛好
32. その他 ( )

〈大学〉

1. 大学のカリキュラムにある不適切さ
2. 多すぎる必修科目・指定科目
3. 学習オリエンテーションの不備
4. 1・2年次一般教養科目に対する幻滅
5. 大学教師の教授法研究不足
6. 教授内容の抽象性・難しさ
7. テキスト使用講義のマンネリズム
8. 大教室・多人数・マイク講義
9. 大学教員との個人的接触の少なさ

10. 学習評価の甘さ・卒業の容易性
11. 評価の厳しさ・単位取得の困難性
12. 休講の多さ
13. その他（ ）。

〈家庭〉

1. 幼児期の甘やかし    2. 少年期の過保護・過干渉    3. 塾通いの無理
4. 親の現在の放任姿勢・教育力の欠如    5. 親の過期待    6. 家庭の混乱
7. 親子の世代断絶    8. その他（ ）。

〈学校教育〉

1. 小・中学校カリキュラムの不適切さ    2. 中学・高校教育の知識暗記主義
3. マル・バツ式試験方式    4. 厳しい管理主義校則    5. 教師の体罰
6. 教師の過度の進路干渉    7. 主体性・自発性を育てない一斉教育
8. 厳しい進学準備教育
9. 中学・高校での校内暴力問題による教師の学習指導不足
10. 校内暴力による生活指導不足    11. 受験技術養成の予備校教育
12. その他（ ）。

〈時代・社会〉

1. 飽食時代・成熟社会    2. テレビ・漫画雑誌などの誘引力や刺激
3. レジャー産業の偉力    4. 時代の不確定性・閉塞性
5. 「なるようになる」という楽観主義的風潮    6. 政治への不信
7. 拝金時代への蔑視感情    8. 既成社会への幻滅や反感
9. 大人との人間関係断絶    10. 大人の指導力不足
11. 問題をもつ入学試験制度    12. 教員採用試験合格の困難さ
13. 売り手市場の就職・アルバイトの容認
14. その他（ ）。

\* 以上の多くの要因中、最大の要因は何でしょうか？

（ ）。

VII 現代の大学生一般に対する所感 ……

1. 学習に関してだけでなく、生活全般にわたって問題が多い。
2. 学習生活には問題があっても、総じて他の面では希望が持てる。
3. 少なくとも（ ）%くらいの学生には将来を期待できる。
4. 文科系の教育効果は長い眼で見るべきで、それを期待して努力するのみ。
5. 文科系はともかく、理科系・工学系は厳しく指導されていて問題はない。

6. 大学教育は講義以外でも学力や人格形成に貢献しているので心配はない。
7. 社会に出れば、自然必要に応じて努力し、一人の社会の支え手になる。
8. このままでは将来国際社会で日本の位置が危険である。
9. 時代の傾向で致し方がない。大人の方が価値観を変えるべきだろう。
10. その他 ( )。

御協力有難うございました。



### 大学生の学習態度に関するアンケート (注、中高教員対象)

吉 岡 剛

\*該当項目に「マルじるし」をお付けください。また ( ) 内に必要に応じて御記入をお願い致します。

#### I 勤務学校と対象生徒、そして回答者御自身について ……

1. 種類 …… 1. 公立中学校 2. 私立中学校 3. 公立高等学校  
4. 私立高等学校
2. 学校所在地 …… 1. 政令指定都市 2. 人口 30 万以上の都市  
3. 10 万以上の市 4. その他の市 5. 郡 6. 町  
7. 村
3. 課程 …… 1. 普通 2. 商業 3. 工業 4. 農業 5. 家庭  
6. 保育 7. ( )
4. 全校生徒数 (約 ) 名, (内, 女子・約 ) 名。
5. 高等学校ないし短期大学・大学への進学希望者 ……
  1. 男子 (約 ) 割, このうち, 国公立希望者 (約 ) 割。
  2. 女子 (約 ) 割, このうち, 国公立希望者 (約 ) 割。
6. 家庭教師や塾に学んでいると考えられる者 …… (約 ) 割。
7. 能力別編成は? …… 1. している 2. していない 3. 計画中  
4. 思案中
8. 進路別編成は? …… 1. している 2. していない 3. 計画中  
4. 思案中

### 現今大学生の学習意欲に関する一考察 (3)

9. 職名 …… 1. 教諭 (      年担任)      2. 教頭      3. 校長  
4. その他 (                      )
10. 主たる担当教科 …… (      ) 年生, (                      ) 科。
11. 教育経験 …… (      ) 年。

## II 生徒の学習生活状況 …… (判断対象・約 名)

1. 学習意欲のある生徒 …… 1. 全員 2. 3分の2 3. 半分  
4. 3分の1 ( )
2. 普段の授業出席者 …… 1. 全員 2. 9割 3. 8割 4. 7割
3. 授業への遅刻・早退者 ……  
1. いない 2. 少ない 3. 普通 ( 人) 4. 多い 5. 非常に多い
4. 授業中勝手に出入りする者 ……  
1. いない 2. 少ない 3. 普通 ( 人) 4. 多い 5. 非常に多い
5. 登校しながら授業に出席しない者 ……  
1. いない 2. 少ない 3. 普通 ( 人) 4. 多い 5. 非常に多い
6. 授業中私語する者 ……  
1. いない 2. 少ない 3. 普通 ( 人) 4. 多い 5. 非常に多い
7. 忘れ物の多い者 ……  
1. いない 2. 少ない 3. 普通 ( 人) 4. 多い 5. 非常に多い
8. 学習遅滞者 ……  
1. いない 2. 少ない 3. 普通 ( 人) 4. 多い 5. 非常に多い
9. 授業中いわゆる内職する者 ……  
1. いない 2. 少ない 3. 普通 ( 人) 4. 多い 5. 非常に多い
10. 学校や教師に反抗的な者 ……  
1. いない 2. 少ない 3. 普通 ( 人) 4. 多い 5. 非常に多い
11. 登校拒否・怠学・退学で相談されるケース ……  
1. いない 2. 少ない 3. 普通 ( 人) 4. 多い 5. 非常に多い
12. 授業中、自発的に質問する者 ……  
1. 非常に多い 2. 多い 3. 普通 ( 人) 4. 少ない 5. いない
13. 発問に対して積極的に答える者 ……  
1. 非常に多い 2. 多い 3. 普通 ( 人) 4. 少ない 5. いない
14. 授業中、ノートを着実に取る者 ……  
1. 非常に多い 2. 多い 3. 普通 ( 人) 4. 少ない 5. いない



15. 宿題の達成率 ……

1. 非常に高い 2. 高い 3. 普通 ( 人) 4. 低い 5. 非常に低い

16. グループ学習の可能性 ……

1. 非常に高い 2. 高い 3. 普通 ( 人) 4. 低い 5. 非常に低い

17. 教師の要求水準からみた試験の結果 ……

1. 非常に高い 2. 高い 3. 普通 ( 人) 4. 低い 5. 非常に低い

18. 研究や討論で発表力のある者 ……

1. 非常に多い 2. 多い 3. 普通 ( 人) 4. 少ない 5. いない

19. 勉強以外ならもっと自己を生かせると思われる者 ……

1. 非常に多い 2. 多い 3. 普通 ( 人) 4. 少ない 5. いない

20. 総じて授業の雰囲気は? ……

1. 熱心 2. 真面目 3. 静か 4. 沈滞 5. 騒がしい

III 進学や将来に関して ……

1. (中学校の方へ) 高校への進学希望理由で多いのは?(3・4項目選択)

1. 今日高校進学は当然である。 2. 良い就職口がなかった。 3. 親が勧める。  
4. 友達の多くが行く。 5. 高校生活への期待。  
6. スポーツや音楽などを楽しむ。 7. 中学卒だけで社会に出るのは不安。  
8. 中卒では他人に馬鹿にされる。 9. 中卒では就職や其の後の人生が不利である。  
10. 知識や技術を身に着ける。 11. 大学進学の資格を得る。  
12. 専門の資格を取る。 13. 高校在学中に自分の進路を考える。

その他 ( )。

2. 大学への進学希望で多いのは?(5・6項目選択)

1. 親が勧める。 2. 友人が行く。 3. 就職に有利。  
4. 高校卒で社会に出るのは不安。 5. 教養を身に着ける。 6. もっと勉強したい。  
7. 実力(知識・技術)を身に着ける。 8. 資格を取りたい。  
9. 開放感や自由を味わいたい。 10. 大学在学中に将来を考える。  
11. 自分の生活を充実させる。 12. 趣味・関心のある部門の専門性を深める。  
13. クラブ活動や好きなスポーツを楽しむ。  
14. スポーツ選手として世に出る準備をする。  
15. ボランティア活動などに参加して社会に貢献する。  
16. アルバイトや海外旅行を体験する。 17. 高校までとは違う友人を大勢持つ。  
18. 将来の生き方を考えると、大学を出ておく必要がある。

19. その他 ( )。

3. 将来の職業として生徒が主に考えているものは？

1. 教育関係    2. 公務員    3. 金融関係    4. 会社事務    5. 会社営業マン
6. 福祉関係    7. ジャーナリスト    8. 出版放送関係    9. 学者・研究者
10. 科学者    11. 技術者    12. タイピスト    13. コンピューター関係
14. タレント    15. 芸能関係    16. プロ・スポーツ選手    17. 医者
18. 看護婦・看護師    19. 薬剤師    20. 政治家    21. 検事    22. 弁護士
23. 裁判官    24. 警察官    25. 自衛隊員    26. 商店経営    27. 店員
28. デザイン関係    29. 服飾関係    30. 美容師    31. 理容師    32. 運転手
33. 農業    34. 牧畜業    35. 水産業    36. 船舶関係    37. 建築関係
38. 工員    39. 通訳    40. 旅行関係    41. 宗教関係    42. 海外協力隊員
43. 製造業    44. 食品関係    45. 交通運輸関係    46. 郵便関係
47. まんが家    48. 画家    49. 作家・詩人    50. 音楽家    51. 主婦
52. アルバイター    53. 未定    54. その他（                      ）。

IV 大学での学習意欲が低下しているとすれば、その要因として考えられるのは？

1. 入試勉強での消耗                      2. 知的好奇心の低下
3. 学習法の無知                      4. 学問への学力不足
5. 大学合格の安堵感・空白感                      6. 大学生活の解放感・自由感
7. 無関心・無気力・無感動                      8. 慣れあいの友人
9. 専攻選択のミス                      10. 家庭の不和
11. 家庭の教育力の低下                      12. 親の過保護・過干渉
13. 大学での講義の魅力欠如                      14. 大学のマス・プロ授業
15. 大学の休講の多さ                      16. 大学の学習オリエンテーションの不備
17. 高校の焼き直し的一般教養科目                      18. 大学のカリキュラムの不適切さ
19. 多すぎる必修科目・指定科目                      20. 大学の評価の甘さ・単位取得の容易さ
21. 大学教員の指導力不足                      22. 小学校教育に欠陥
23. 中学校の教育・指導に欠陥                      24. これまでの暗記主義教育
25. これまでの個性無視の教育                      26. 盛沢山の高校の教育内容
27. 高校教師の指導力不足                      28. 充実した学習体験の欠如
29. これまでの厳しい管理主義教育                      30. これまでのマル・バツ式試験方法
31. 教師の過度の進路干渉                      32. 校内暴力体験の後遺症
33. 教師不信・既成価値不信                      34. 進学理由の薄弱さ
35. 自律心の欠如                      36. 将来への展望欠如
37. 未成熟                      38. 本人の性格

- |                              |                        |
|------------------------------|------------------------|
| 39. 飽食時代・成熟社会                | 40. なるようになる社会・時代への甘い見方 |
| 41. 売手市場の就職                  | 42. 有用性重視の価値観          |
| 43. 社会・政治への幻滅                | 44. スポーツの魅力            |
| 45. テレビ・まんが・ゲーム・レジャーなど娯楽の誘引力 |                        |
| 46. アルバイトの魅力                 | 47. クラブ・サークルの忙しさと疲労    |
| 48. 努力や勤勉に対する価値観の崩壊          | 49. 第2・第3志望大学への不本意な進学  |
| 50. 進学や自炊など雑事の繁忙さ            |                        |
| 51. その他 (                    | )。                     |

V 将来について ……

1. 大学の入試方法を改善しない限り、生徒たちの動向は益々悪くなるだろう。
2. 大衆大学水準に達した日本の大学では、今後とも学習意欲の高い学生ばかりを期待するのは無理である。
3. 教師の側が、現代の若者文化を見極めて、教育内容・方法を変える必要がある。
4. 大学が、入学は易しいが、卒業は難しい体制を造って、厳しく指導すべきである。
5. 幼児期の家庭教育から見直していく必要がある。
6. 人格形成は何も学校だけが担当するわけではなく、社会に出れば、そこそこに社会の担い手として成長するのだから、楽観してよい。
7. 同年齢者の3分の1を養成する大学がしっかりしないと、国際社会で日本は危機に瀕するだろう。
8. その他 (

)。

VI 御自分の大学体験や、教え子の卒業生を通して知る大学の一般的問題点を自由にまた率直に教えてください。

御協力有難うございました。